和歌

更科紀

下

へ4
1652
2止

更科之記下

一 歌にあまたの称あり
長歌 短哥 旋頭 混本 廻文 源頌
折句 畳句 俳諧等也

一 長歌とはみな人しれるよりあまりてすまたの紀と申ともそれは古人のあやまりとて師匠なりし人は短歌と申されき三十一字乃歌は長歌といはれきいつれもは三十一字乃みしかきと云せ哥としそのうちよりも短歌と名付るや
答曰三十一字の此歌は神代の字よりいひならはせることをとらへきとして後の世にいたるまで字ひ

［蔵書印］
ヘ 利 七
1659
2

をせろ擬しみけるとさこゝろざしをとこるなれ
しておなじ友に神のうたれさりし歌ハなかりし
とぞされど長歌とはいへりとこゝろえまうけ
また短歌ともけうて事ハ神乃文字より
いひおこりの事ぞたうち捨て縁りひのまで初り
ひのまでくされり擬して殺の擬なまでともさ
をとろよくされかをまたはみしうとするなよ短哥
とはいへり。ゆえにことばに付へうちよむ歌の
事ハ父母なうまでも三代乃みかど御時ハは
まろ事もなうもいつまれ文字よりまさことを
文字よりよむハ混乱すに如くよまるなり

みじか歌のをやうは五七五七七と相わかちてよみけて
さそしと思ふと紀姫乃五七五七七ともあふ歌はせ
とあまりの別義をとこの三十一字に定まれ
たゞし三十一字乃歌ハ残りてまたにあまりまするなる是
と長歌といふんとおりふと紀さぞこゝ名は事あ
里同心なる人一して秘せし長歌短歌さらなる文字は
あるひとを短歌とし其人に同じ時の名ましたる
し給ふ

人丸短歌　伊勢にて

真淵　かみ　あまれを海さる　家乃うちに
年へてまたし　いせのあまをも　ふみかへずして
こゝにしてまたあらんやうな見ぬにのちに

あそこれ文字に限りあるがゆゑに　ことわりつくしがたし
時雨して　秋の紅葉を　ひとしくは
そのちかく　ひのまへに　このむかしより
なりたる　と梅の枝にも　さだれとなるにも
此事紀貫之　むかしより　宣長翁の云
ちかつての　すゑまつりて　よそにてしるし
菅神乃歌おかけまくもかしこきとてしるべき朝を
かきしにてこふくわうこし文萬葉集の中にとり
あり句是二首そてあの歌を
うくひとの　かへこれ中に　かくこそは
ひとりむまれて　しやうらに　独くすれは

しやかうに　ゆくすゑは
是をおほかけまくも数くも絶さるを
一旋頭哥といふものあり例乃三十一字乃中よ
いま一句をかくあつめし文字数もて心を理
せさりくふするところをよむ人乃ちから縁よ住ける
しるあまりともゐ文字乃句二ツもあるなるにより
まん事をわすこれるへしといふ是を旋頭哥云
まれにみそこれかけよむしひかく
みつとなりしそ立てぬ翁よあふひとすれ
中よ七文字の数くへてみるを
かの思ひ旋頭歌とのことしるなありそ

わりなしや思ひさへこそまくさにせん
是は七文字歌中に心を用べし
うちわたすをちかた人にもの申すわれそのそこに
しろくさけるはなにの花ぞも
此歌はそこに七文字の歌をつけたるゆへかくいふ
わけてもそのみをもて旋頭といふなり
一 混本歌とはもとのあり例乃三十一字の歌乃中
よりまた一句の歌をはぶきたるを混本歌といふ
朝がほの夕かげまたぬちりやすき花のよぞかし
此歌は末乃七文字の歌を略したる
岩のうへにねざす松枝乃とのみこそ心をあるものを

此歌は中乃七文字の句をもちてあまり一句ありてそ
乃七もじ乃句のすくなき此歌をもちいけ乃句のたらざる
かなしにけりといふなり
一 折句の歌といふはいつもの文字ある物乃名を五
句乃上に置てよむなり小野小町が姫今
を人によみてやりける
ことのはも　ときはなるをば　たのまなん
まつを見よかし　へてはちるやと
ゆし
このたい　とこなつのみ　なれそうと
おもふに人よ　あつすれは業
此歌は姫今をたゞ世と云文字句の上に置てよみたる也

まことに琴ハ箏と同じ絃乃上に並べくまじきを

一みたりがつかひ折句乃体といふ有り

おもひをし　そそハゆきみ　ゆふかをかね

たつたきへ　きみきたへさし

ちぎれは仁和の帝乃かたちにてまつり給けるを

みな心をとえ出かたしと云るなるとかえりけ

あらためてきつれの息こをぞうれしかりき薫と

一まいらせたる歌を心ある人事にかかりけるを

けふこそ中々に染めし

一となみのはしそれを知らる事ハ我すへてよみたつ

とおもへば　ろう枝そ　をりそ海を

無しかたふかやれ　あさしきこえき

其筆ハ下の花をさへ見れハ内々に海ありとみえ無かり初乃句

一字とそ乃七文字をの一字なしとなり

文初乃一字とそて乃一字と我か句ありになりて

あやまれをこれ歌を盛るをけるをとを

らりるれろ乃五文字乃上字にあるハありかかり

わかハよのまれに説弁のあるあり

ら　らら乃ららたくて梅のこまれららまけて

乃まうとのこころ難乃うちのう

り　里ん無きれの花ハ我さむらうかさきわしし乃

雑よしし無きを無しらう　きり

る　かりそめの浮世の願が露と消く
それをかてそおりし志つて

れ　是ハのまことそくよの中すゝ人ゆ無ふ
心なくしてまよれはそする

ろ　ろくいそてみすとも志らぬゆふ霊み
うきよかあ方病ま乃月しろ

右ハ老子の事をかけまことをしれつゝまろくに
めくしに須方草稚よりおのにより中のまつ迎也
心乃しれつは無とくよ名を行まことをもしはふ
うきハらうまれなる大事よおかゆかれは
よの中の是也

一廻ふとはかりそめのうきよをおもふかくに
よの中のつねこれ是ハ小論語の奇に
むかしまでのくさきそのまゝにそれは
おそしともれきにたてん
行しめとをつかふいはゝとをし物くさハ
色をつかふいつとまめしと
此道ハ当冠ともいふ也しば歌乃科之事あり
よむ人をあきたとも能をもし頭字によりむ
てにおはれ口伝よありいろはふいさく
いきいろはにかへと也
とてちまたのめくるをそしと

はるさ　くとり　よなよな　ころさ　あはれ　さらに　つまつ
ねざめ　うつゝ　いかにも　ぬるぬる　のみ
なかなか　さくさく　やれやれ　ますます　はらはら　みゝ
さすが　てうて　あのあ　さすがに　ゆうゆう　あやあや
みるゝ　ちるゝ　ゑてゑ　ひゑいのも　せゝせ　すゝき
光跡に光抛の中に此抛事に丁抛こと
一隠題といふは〇〇と云物名事なるハあるはなれてみよ
みかくれにいふかきなるかくれ哥
ととしとも年をめくりてさくらを
そのめもちかきことしも人そ知らぬ
あさみよめのやしろめくしめの哥

なゝとなとみなみよりなかをさりを
あふふねのきやく白く往らん
一重句と云事あり
心なきし云ハ成ところなんなる也
云乃あるはところなり
一俳諧
姫乃野より春のかそこりとあみなき
あふかしより我とるしまん
一賦合ともハ歌ハ我の色とも我々の事はなにて事
なり人の家とくありゆくおかしけれどもなり
見ならぬ事も家もさなくあるたまへハこ

人乃世事をえらひ給ひしいはれ色乃ちかひにた
え給事をはなれはまかしいふ文別乃事はなしと
いふまえ古今の詞ハ飾くして色をあり心を用し事
なれハ云義ハ飾り色くして色をあらまし歌ハ飾よあ
ることを世事なれハかく能事なり紀をもあるをも

一小野小町かもとへ真静法師か詞を歌によみて
て安倍清行か

つゝめとも袖にたまらぬ白玉は
人をみぬめの涙なりけり

返し　小町

おろかなる涙そ袖に玉はなす

此色は世紀の色にはさりせまほ

一業平か家に侍りける女にやりける
つれ/\のなかめにまさる涙川
袖のみぬれてあふよしもなし

一といへる返事に業平女にかはりて
あさみこそ袖はひつらめ涙川
身さへなかるときかはたのまん

一大貳三位は紫式部かむすめにて後
冷泉院御乳母よ
まつ人のこゝろのとをきみなれは
里めくのみそおもはてなん

とありけるは大貳三位の御返事

　たえみれ松ともしらぬふるさとに

　　君ゆへ我もひとりかなしき

これハ御とひかへしとなりしまへる事乃なに
すらへきハ先あとこ乃うハあまりなき事おかしき
ハ猶さん人のもとへ返る歌と聞く心えてよむ
趣し拙ふ中絶洞もとて嘉一所へまゐらんものゝ謹ハ
松は君ゑ子はかまぬこ上乃御事成まく
中将すらよそにみ人ハ我君のみなといはんぬこ君と
思ひつきは唯をその上の御事とひ人も知りし成と
これハ今の教訓と又あきつむ明らかにしとの給ふ

あり和歌の心利をはり趣作て向こと我いさうしあそ
むといふ事も人の口まゐる我をとかあらう如く名付らう
いそうしくおりいあへさらんと紀乃総事またさえあ
家趣し一字成をて文字事師り神妙也事う
ハあらんむりしをいま其おかけまとそ乃とておかけ
思ひさのみをて須さん我殺る中に入る事ハあるへ八
これをあつむ人へしとを云趣紀後一条院上東門院行幸
ろ上東門院へ

御返事　上東門院

　そのゝやいろの思ひきん君白野乃

　　おするみちりしをそくりゆりける

くもりなき紀世乃ひかりをや春日野乃
おなじみちをもつて据くらん
かくにあやめも歌のうへも詞とこれ歌とにはくるゆ
ともに日心同詞なるハおのづから三句さへるくは
らるる二句まで常此事しけるよ須とも示乃句に
まさるかなりて詞歌の無きやうなり
あされりと名よそそれさへて新
ことにすぐれたる人をもちきり
といふ無の世事はあされりともあさきを
なひのまれなりしともいふ無歌よそれ是ハおのづ
ともいなく業平此世事に

はなさそは嵐白小雲とそいひける
こころえをはありともみえまじや
今までは一乃句とし先なる(?)ほかなりける事おほし
ともまてはし心ゆてかなりる人く業平ハことに優
とよくいひけるなり
一古歌ハ歌よりの事此一乃大事とし上手此見申事と
言のもしともいふ上のすぢぬ人をも古歌よく執人白が
まし上手此中のもも古歌えてぬをあり此中に二
句の後あり一字は詞ハ歌よりて心歌の無二字ハ心歌
人て心なりけりて初ハ歌の人をもあり初歌より
て風情歌の人なれハ風情歌よりの事ハ心りと

ともなん有しの歌にて物おもひそといふは古今の恋に
月夜よし夜よしと人につけやらは
こてふにゝたりまたすしもあらす
とよめるは万葉なり
我やとの梅さきたりとつけやらは
こてふにゝたりちりぬともよし
とよめる歌によめり是は心も詞もおなしやうにて梅と
月とのかはりあるはかりなりしかるをあはれにもおもふ
初の歌は心も詞もおなしかるをうつしかへたるを集
乃歌すとは古歌を本歌とするやうにしたれはなりといふ
とりなくよめるもあかし

人めには菱野の菜をもけふとても
いとも我としらさりけれは
とよめる歌を本とは菱野乃まてけふとてもとよ
紀乃文
あしひきの山さくら花のちりかたく
我恋すんをやめんかわし
とある歌山さくら花の名よいつまてとかわり塩やき
里あるきつけ乃をとめてとふかれともいへ
歌なれしかやきは鶴とをわりて須磨
乃海士の塩やき衣を歌あるこ海の歌よあまは
いまくこれ家一は古き歌塩やく海士のうらうら

こととふさかりと詠ハ猶ともとしもかくとありけりとか
ふかきつかふ山乃井みもいゑをそ人丸か
　むすふ手の此雫のほとは奥山の
　岩乃紀しみかわあかぬ乃れ
とよミ給ひけり又三輪山ハ志るしのかくれなき
よミしもとをとみく　川水よりをはく　みわ乃
川ありて川水又あるにあたくいそねすといゑる人
丸のも萬葉乃古紀云記ハとありて又衣さに中
よありしといゑるハ後撰の前に清かりし中
よみこそよりしといゑるをりけむ如数かりて上
古ハめしたの中古ハ萬葉の事まかちて紀世よし

又をりしちくは經信卿
　をみり此まへ紋あきりの嵐吹ろに
　聲すらそふかたゝ川志ろすみ
とい乃紋をりて
　おさき川の嵐吹りきしるをみゆれ此
　まれさ川之紋あるふしろすみ
とそありめけとれり紋上ふとはゆしりきとあり
くみくにいらて是ととり計紋せんまて我んをも詞
をすそいそへもはよみら此魔もむかうさ或郷およ
云現大身滿虛空現小身入芥子とい色り境寺云
　我中その胞すりかりて擬ちれ

ちりはてえてとくめさりきれ
東三條左大臣なりて、かさん花のくるゝ中といふ事の新恒
の花をうくれぬとし春のとよありとこしちの紀世乃さ
かしより入谷より〳〵のと思わくやといふ事の八然さ
ありしとわりされとも歌の様は歌ハ然よろさかくかい
わゆ世志れんよかの色の紀古歌をとられ事ハ歌
よ兩めわかへの霊も作る〳〵川の事すれとも我とあ
はりしくよくめんとはとゝろへくやとも色く来
乃世の人いまん歌乃風情詞もよさ清くしてさの
あくりしくよ於事ハあり所こけれハ歌乃躰と
つまく出よはくくもあるか歌とよろ川乃ひとふ

かくりぬの不もす紀事然上ま見あらめありんとくく
れそろしけすの萬葉乃詞古歌をとりすしてまへ
をとゝぬいわゝお我心より八能よあれしかおもむよ
とともとうしけちめわるんとてすらぬ二句すこ百を
常の事とあ句とる事ハ至ろ人へ〳〵よれ大切こ事なけ
さるんよい古歌乃詞てゝおかりしとる紀事然て先
ちれ雅をとめ事もちろく要色しとい色り
一歌よ大事の五つの然もとた事あり近くも清輔朝
臣うてゝ風よ要をれと八十餘のけくといふ哥
をはてもしまし〳〵わもしともあしくとまさるく
世にも數まこ雲霞乃てゝおかりく紀乃我方もさよ

並ねかりそといふやうなれて是迄の風ことし
らきらく又高しとして花乃かりひめ色は紛も乃ゝり
へつしかるあつしいきらを指よりよるへしあしらたん
ハかくるふしかる人へし歌よみすらねハかゝ此とその
事まてをんゆるし月ニ宮の月てよろくもあらさき
こゆるもあし歳よみ字乃うつりて耳にふ川を
あかし月やそれとそやい稚のすてい無うみ字は
つきかりもあく一花乃名残二ふ引切々阿く
ふ事ハ上ニ此ふ川とせぬ事も
一あゝに拙ふ忌嫌あるへし歌合よかくなハかさ此雑
ハよく秘く家鍾く思惟すへし

君乃御運ハ歌乃拙ふ忌ニよりて入ニまはあらす家紀
三乃てふ乃事ハ為性実ニ申く又よふ其乃中さ
色失さあるし忠岑カ拙ふ忌すて讀て窮煩し雑
也ろうし哥

しら雪乃ふりかゝる山とこそなりゆく
家ねかり花やちりゆくよまらん

と讀て後よ紀事よハあらす又堀川院乃御时
長忠か歌ま中せけのあ歌り菅後郎といふ事
とあしらりけかいまくし紀事と同院乃中よの
歌合よ仲実か家りさまの一ミそのとよあつみる失
ありめ此事昔今あかり賢子其侍乘よ着言

お頭よ月斬田隠と云事をおもへすり京乃内侍ぅ
秋合よりいてこちらの始まりんとよめるをあり
ちまみる標ありまさおり無付意の前よんちぅう
をくてこの人の事に又りらか事を云会えをりま七
行り弘徽殿女御乃歌合に永成法師ぅ与ゥ
君ヵ代とはに清乃昔やまとろくと
らとこうるるにいとをもしろけれ
とらかる地にも心知の事と言う無にとも行られて
金葉集ヶ入れられし撰者之外のおやまちとしむ
人ハとてもくゝてもおもへし集へ故えん此のかの
人なゆの無兄弟紀見もしあらて いはこる事八

いかんかられき先達も無く金葉集よんひとる
ともみおりて撰く此名をも清まく作さむら
無頼しおもさ此名の中に式部大輔なりつる
とりまじひちつきおもしと名付られし己集
と云心にや此名をそへてけのたと無に撰名ハしく字
をとこのもとうのおもある人乃内しらかさのをもなき紀
家りてさ一人けらてえしひのうれなく
ひる事おかりまなめりと時の人ゝ無りられ
なせらく我一人してさりといまれんとて三寺
むしきつらとそ人へ作こしけるめは此事に
まりくれのひたるく無色し兄ろうむろんわ

まいらんの心うつる事こそおもしろけれ文にても
しられぬまゝの面白くくるしからぬこすへき事と

一 山城 ちかきわたりの名所并に万葉
さかの山おもしろの名所の中にも根深の家
乃ちかき所をもよし野 龍田などの名所のそのかうし
里あり事ハよめともおもしろく其の所の名どころとか
いとはめでたし名所の中にもおもしろき
ゆかし　大和 神楽山 岩倉山 三わひの山 うねびや
あまをとは海ハ志かのひきとり面白き山や志づまを
八山ハ生死無常の哈き もとの山名ぞらむすめ
ぞ面白山 志かくの山 いさみの大野 万葉よまむは

おもしろけれ おもしろの里 まさの池 桜谷
志くの浦 ひろの川 いさせ川 おもしろき 錦の図
又あり世 おもしろき雲の月と花をもいさ面白き所
なけれとも名所は万葉にハ新世と多り
おもしろき名所の次いはまし面白し

一 岩代乃松ハ事にハおもしろき浦ハ近き縁
ゆかしくかけもとを結ぶ所あるへし
うつせみの世 こゝろの家 さるの海 生死の海也
露のよ あはれ 摂津ぞよりおもしろ
縁を面白くの庭 まことに
さ道ハ納涼りも不可縁 古ゑ霊を海 古絵様

むかしの康時よりも題の時はかならず兼題と
さだまりけるにや あまた見侍りしに 多くは
此世にはなれたるなく むかしの題 屏風
紙などの書 是ハ常の事也 いかなる題をも付る
かハ遊 雲隠日月のむかし 是ハみな
後にしも事也 祝例あり 仲平云伊勢に宮人年
御宮のもとにしかるに 尚此頃切人のものがより

一 歌のみならず 此事先例是と雑と祝事なし
むかし題を紀事に祝事の外とありては なく〳〵
にいそぎよ歌さらんみしかど 紀歌すらは皆人の書ら
を兼題 歌合よりいひけるを うたの題 書えやしらずんと

御子左經信卿なく此源經信卿にはよき人しか題乃
ことを文字の上にをゆゑによむべきなり

一 ことに述懐とあるは わきまへかたき歌や 文意すくなき事に
よりてよく〳〵の事をあきらむべきなくば いかゞ
まことやあらんことをあやし

一 堀川院の中宮女房花就近年云歌よりて
上御製より題をまでおりてよろしきに 櫻花折
ての歌ともにかく題のおもひ給ひてよめるはいみじ
ある人禁中にてかくおほしにて云事これなどいまも
清輔朝臣例後のまゝり拾遺の歌など見てぞおりて
君が代のためにかくれ梅花と源重信朝臣の歌これ

康保三年九月にていふ物ありし下紐別
の事なきをもちてうつしてされ新
といふへきなれ
一 格らうしなる 作りしみ 古今しなる あり
とみ深 うけたまはりしるしみなる家の和歌とゆるは
とりて読曲ゆるんまんふ夜かなしきゆるく八読
まりなしを九月なかけもし思ひいと信ひて
正月して気まるるゆくえしる也へし 正宮
まゐらせてんけるなる 従来の歌合よ朋忠か歌
宿九掾えよみく読せ負ていそ難まれ
とゆされて持ちる萬暦後の番よ朋長

古の頃ハ未つゝふかく読たる人ハさもなる歌人なるべし
をえらひ入たる文字ハ心なりよむ事ハすへて
なかし物の心をのみよむ事とあり
一 歌合すらぬよ八題をみるは心くと申ハあるかよ
すし屏風のうへ此歌ハ題の文字おもかけむとを
よみかふるひくよむ無名題にも殆つま
んとされハ歌心あるきこゆり又されハとて作や
く題をよくよあつを正我すくえくりめ
し事此哥ハ大事し經信卿ハ覧池上月を序に思ふる
乃水と読く池よをゆる後頼ハ爾後野草ゆるあ
さらすみなくよみく野草にゆらかりも物すそいひ

つまは毎く行すじよありめでし事不可勝計野
亭八よ是れ言のやしなひつまはあり山家殺絡
乃称年し讀りなるのけとい於りひせうしあなら
可影殺よ見いまんとはでれ若ま殺まして歌いとを
知らぬ人の為ゆ定ありぬ人きこしよく於りひ
約色し文を兩殺を以て勢殺よむハ雑ご
とへハあらしと云こともり讀やとい爲り・
一歌を眼耳鼻舌身意よあて行事あり
一眼ハ撲子れ作さふきこしれあらの
山乃ひかり見ゆかしし雲
一耳 行ちく顔康ねかせしうくいとを此
なくて忍ぶけし翔のなくねぬ
一鼻 とのゝりれことのをやけし心あるは
これ言とらり翔きよあまされ
一舌 ありなてぬいのちまへのあとぶり
う於事言けくすけらとまされ・
一身 俺やまし又身をう於第見ね殺あてく
作るふ水あらはいすんとそおりふ
一意 す於名をと人よはらひくあり為逸
こころをとはいうくらえん
見又六義殺よ前く通せし大くこらり行り詠じ
一和歌ハ義翔乃風俗なまし八御門指定をこらしめ

まていふ紀伊のおほん乃あふれぬるまても心
あらん非ることあらんやされは天智天皇御母に
斉明帝ありて筑前国上座郡朝倉と云
所乃山中に黒木乃丸屋を作てましまし
これを木の丸殿と云丸木にて作る故なり
太宰府の時なる木屋にて小朝の別所にしたる
ハ彼時の例し民を労られ文造をする人々をと云
よしこ唐堯乃茅茨小殿も丸木も残りちぬるやの
のこ教えを作りきる御かしこきその手のまつり
事りは用心なしのつけきは入る人を名のらせ
名乃りなしけるとて此歌はなりけんよみ給けり

朝倉や木の丸殿に我をれは
名のりをしつゝ行くは誰か子そ

天智天皇乃御歌也是は民をいつくしみ給ひて
うつひをあつかりけるもそのみち国く此風俗を
えうひ作さみけりと紀此聖帝乃帝此御余乃余
ともにくへられきゐるふうえひそくらまはけりかなり
又弱きをも御とも紀今も無われかりとて朝倉
取らは貝あ家桃事し大くて歌の在する賢王
乃めて無紀御世すはもろく此道を捨すに無るる
おはせ人舎本文の外人の志を知まるものハ作せる紀
そのまりとを婦無ることも深く名云出来ちりまれつち

へ銭ゆつゝあしかふさる紀て主銭を須海いさそ
さなりぬ銭ていふはあしかかり深あまりて主銭をたれ
といふ事有又明主乃人とすてあらぬゆへくまとを
作りふたゝふすゝれる銭も經と銭も用ふ心たり
又人食物を婚事あま月を身分を居とと
もありかたく大人主い屋しう銭婦る事のこれ
とかくしより家をいふをしけまハとてもあやまり
て賞をもきくへつゝれふくけま月にして見るか
さらし刑をもさる人をして有まるゝくハとし紀
然くミ銭知とこれ無しと彩るへし
一 又人は一家とりあま月にして主紀罪銭とこるふ

事らく思ふありあるへし麒麟と云かしこ紀歎
もとものつゝ一路乃あやまち是よりあらく深人をても
いふそれは天理銭たるれまん錢ましはよかい無かり
まくみ罷銭ゆへして賞をとるへしと也
主兵とかあまくと家は及そくかなふるへし經書と
ありて身乃用ハ銭つま無切く人とあさむきて
まい縁とたりもむ旗を深くきりそく無しま
それハ儒人朝よあまは君臣乃名氏さきまれとも
後漢乃それをさし紀ハ孔黒子代にて紀をまあるま
明ゝし家くゆまハ不思乃掌ハ諸にに嬉め限
よあゝれ無くふくあるんてよのミ銭ゆへし銭る

さて筆をもちならはんとおもはゞまづ八
體乃字学をもならひつとめおもひ給ハゞ
はやく手習ひ後見のおさなき者にならひ
一 大かた和字をも名家とするハ年ひさしく文の趣を
おほくも人のかたりひゆるされたる人ハその趣を
奇ともしく読ならひてなれぬるにはおやまり
あらぬ奇をも慕ひてならふはそれ人々より下
みなりぬるは雅を加へし心操ともおぼえ文章
ともなくよき人なりといひそめられぬるには
かの先ありてもせめもなくおもひゆるさるべし
大節身にあふ時の觸みことをも考へし

それにしたがふことし詩歌乃ことくにて見えまとし
楚思眇 雲水冷 商聲 管絃秋
此詩ハ韻聲をよみくしき雅なる人のおもしろき秀
句なりとて宮様大納言公任卿乃朗詠集に
撰入られたり 又長元八年三十講乃歌合に
あふまでとせめていのちのをしければ
恋こそ人のいのちなりけれ
けふ此歌ハ二番まてとも作者のかくて勝をとり
同頼乃病あれども歌よみのかたきあれは
ものゝはや人乃あり様をもみてぞ心得
よかり

一 ある根葉心ある色優なる人しも定子皇后を一
条院の后と中関白道隆の御女と彼后の歌や
みをよくおしせおふきたる
まくらのさうしに紫式部かれとも
ことんなることのいひつたへりし紀
と申く御几帳のひかまに詠ひ付きせしかりけ
不紋う装なひく後朝の院にありんし付まりけ
御事ことの内の内々も思切くおかるえき
あけめしおかゆりし
一 ある屋上人水無月なるあまり也ちろいとしてかか
まけりる座んとわする后をとよ楽りてあたりよ

さきとけるふう色なる人乃ともの あまたしけ
きはさりけすくひきくれく乃をにけるふ御所
なのを水に蛍乃おひくとそく紋んくくわさまに
ある女房招くし此蛍やおつめくさん座にある
足ゆもとてなとく哥り次なる人へゆきあるあ都より
て蛍め人乱飛とちなるあめるに文所くおくく
夕殿よ蛍飛とくらもさむ思りにえなる人
くされぬとの八重む此ともるやうふひとりこら
きりけるとりくに座さしくおりしろてこの
とふ水におとりて一晩しすうろんハかいねて
ねるとうか今を志ありしとりきれいかさわる女

房おもしろし萬の事に就ありけるよしとて候座
くさはさぬ事におかめきつゝ事ともあまり
いろ／＼くれ／＼おぼえけるにいまひとつの
なくさみよりもをかしきことなんなりけり
花又おりひとつかたへ行ゆかしき
書とも見くは人の心とりくにてやさしく
それありけるは心ハ言をいひくみて書るかさ
家をなくむしりもあられすまもと家
ころし此女人乃女房ハ天暦乃御時すゝめ
乃女人宮仕のうちに清原元輔か女清少納
言とかやいへる一人ハ紫式部源氏物語作られ

和泉式部なといひし赤染衛門伊勢大輔紫式
部馬内侍なとゝいふ人々なりしとうけたまはり
ころおひさるやさしくそ侍る同院の御時
宮乃内にもおもしろくかうかきし紙端ちく
おさむるひとく雲の上にしけり小香爐峰乃雪
さ随いかんとおもひさされたるけはひ清少
納言御簾をかゝけたりけるか事ハすくてこ
とく殊ま記おほけりなる時の世まてもいとし
きたとへは人のつくへきを行ふ香爐峰の雪九重唐
白楽天の老の後は山乃麓よ一乃草の堂をしめくもを
みけるけふの詩に遺愛寺鐘欹枕聴そはそこや

香爐峯の雪ハさくらもみかへるとあるの紙に
門弟いもうとにかりて見るとは紙わけうるしやに
かりきの事をもたせ人くさかやしれ事のうり
をおしはからひハみえ此事りとしるりけり

一野宮氏歌合乃判者源順し女房とおもへるか
こせうりとて雪乃かくありけり
雲かくれたるおもかけ菊とふりの色はまた
女郎花りはなくひきかへり
よみんたひかりさりまへハ花色如蒸栗俗呼
為女郎同名戯歌與陪先恐悪褒貶者
例霜と明らかにけりまうりて聞くようかりや

いと拙かりしかとかしこし雖然れとも定さしくおかし
うし家ハ後むせる事ハさくそれぬ唐のたとへなり
魏文帝與鍾大理書羽云美玉白如截肪黒
譬純漆赤擬鶏冠黄侔蒸栗とおなし紙か
由りありてしまれにかる事なきうりと覚えていと
いかしされとも由くて判者ハそのおもへさる事
まてもされもなく世の人も無せうれさる人もへ之
とそ師通なりし人ハ申されし後頼ハ十首
なりし人判者ハまたまれとそ申されしなり
もさんなるや源中納言國信の家の歌合後頼
乃判しけれしかとも人くおかしくなどこつまき願はく

此事とも事付うりせや此事ふこうりありけり
まやえおはの光てのおもく人は用ゐらけある
いとこもふしう思て以下の事ふよらく歌なとまを
ても判者としても用ゐらるゝはあるへきなり
一大中臣能宣か父頼基はよかりてありける比
入道式部卿敦実親王の御子日によまれて歌よみつる
まいりて侍りし頼基問云いかに小松の歌をと
千とせまてかきれる松もけふよりハ
きみにひかれてよろつ世やへん
とよめるよし申しに頼基ふかくかんして
なりけりとて能宣をほめ思へき

家門に昇殿をもゆるされくまし乃御子日にあらハ
いかに新歌をてよも無紀をやこきさののしつ
人ハ之れハかゝる能宣ハ歌相しやうし紀文乃子日によ
むやうなかりとて勝たりし能宣かけりくなふ
を撰りられまて用ゐられある人ハ事ともあかれ
おきてをうけ此の事ハおもかりせやあるんを
きに紀の能宣はとて上兵能宣かむかの事を
尾張の事ある人し度義母乃ひある事も
あつき備前寺にて月见侍りけるふ小山家を
月とい事とよみそるま中に花乳明尼ハを
夜しも厳上の番まて明し侍りけるにかなし

うしやましくおりふせんと作くてまれくまよし
御馬を給ふく乃山へ申けりて
そふ人もまた山伏の林乃前ハ
月乃ひかりもきひけりもなり
作乃懐紙乃草案在判中納言としりて云伝
乃おほ家して参居られけり小山の長者し
りふとらへ兄嫂てやまりきれハ花和の願状
深く感応してそのうちに花和羽尺作人に
和歌ハ何も神まつられけり及花和
まりけ此感よる中次してまた菓子出とひより
て帰乃嶺よ入て寮抱しておひまけく

そ始まりけるもとこそ摩訶般若のうひある事なき
うたふ此事ハ能ハそれを人のさへこそ事あるまうとそ
あるうしらくようしく思日たらる無盡し
抑和歌よむ法の二句ある先利定恵乃二法
天地の二つ三宝の法身をとそて迷のまの無ハ
三毒三無謡もいたり情乃花いよの三身三諦よ於
四病八病をとまた無うハ人乃ある四苦八苦ハ於いてふ
並義と五句の象か配六義をとまつハ五神六根を表
も九品十禅とあてそれハ九識九尊十界十如と
無うすうあそ三十一字ハ如来の相好と表すれとも
修の為の力ふものてしもとうし三無く

あはれゆかりある此法をきく
法の声乃かよふは乃ちの乃ちのおもひ
おもひさふらふまてとしそそまけ
此歌ハ我ひとつ佛をも讃ハ我よりまへの神をも納受
給ふといふなりきりかたちのおもてハ歌道ちりぬる戯
哥とふたをも源氏ていふりをおもひはしけるにて
一首二首我郷しるとも三千一字此佛達三千一
字此文ハ白ハ我法のさとりて法性法縁乃月
無明乃雲をはらひさんとるをもあきらかに照し三
諦即是乃花ひらきまん乃花ひらちの開をひらし
を観しけり今生百年乃名ふはわ歌乃浦のふし

ともておもひのく光をそれさん事ハうちえひおり
争ひ済とるれん

右抄書者愚老以一身之所領恩也上古奇絶髄
脳口伝雖如雲如渋淺筆盡心更無此家要
撰者為末代嬰兒須以一巻之趣深源不可出之
是和歌者合不依敎訓已心懐之然而不知其趣
者有誤病之料為源之料撰之者源擇之心
庵不可及他見穴賢々々

[illegible]
左衛門佐基俊　在判

何通よりお伝乃秘書一巻を授けらるゝは此心乃の
ためしては先へ類林より外ハ人に見せぬ事なかれ
は深秘の庭訓すくして指南あるまじくは定賢に

文字三位入道信救　在判

ところあさ事はみちに心さしあれは見る事ぞ
よろしはいまだ家の人にもみせぬ事ぞせよとは
とせすまして其子一人より外ハゆるさすとぞ
也歌の秘書なかしとせよとも外へ深史
御さとゆやとえものハゆるに経吉玉津嶋の此
利生をのせすてあらしく事なす
なく秘とぞされける

信成女　藤原氏　のちのたけあ　在判

此秘書ハ子より外ハゆつりまじき極事にて此家
一子とかぎり家よ当方家をとしてゆつりき
これ家伝にあらんやん家とよにとひおしして後乃世よ秘
ちひつさそてあらん外へゆつらぬ経世乃すへいも下る
乃ゆゝしまれよ家よ家をもつや乃ちりぬくゆつる
なり家にし定賢へ

起請文事　為氏 在判

右者桃花亭之事不可相承紀在家をもつくせむし千顆万顆乃珠のことくみして深くせん事一入身入乃ねよりもたれたるこしく器量あくみえして一字ま一句字殘て次人ありは可傳之此為我絶恐しかんくこれをしるま家我由とりし云筆殺くして子々金我子あまりく須逆長者ら以未とうやまひ早倡とこそあんさあり宮山ま子は全所ま拾しうこくかうんへまハ傳ふ亟しれも外の人ま傳くお　何吉都護人九赤人強下照姫素盞嗚尊ふれ我毅しく今生まへ良く

本乃家之乃六義乃由ら此後まても必可まもる文也三途ま落ゆらん仍起請如く件

正安元年二月十七日

前大納言為世　在判

きしいしそまつみさつふてのねの
とらふはさみつまそこひしき
むかしやさいとろうへさうよ
かへしらうといさやきかん
あらぬのこ袖ねつれみなめさあ
あさのうちよれとものよみそれ
とくしのたちゆきちらし
きゆんのこれとさしるをと

寛文六年丙午六月吉日
[illegible]堂
喜左衛門刊板